

オリーブの樹

第106号

2011年7月17日

شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次 丸岡同志追悼特集

- P 2 暑中お見舞い 重信房子
- P 3 5月6月の歌 重信房子
- P 4 独居より 重信房子
- P 11 ニザール丸岡のこと 重信房子
- P 16 抗議声明 丸岡弁護団
- P 17 決して忘れない、許さない。 丸岡修さんに生きる途を！の会
- P 18 追悼丸岡修同志 ムーブメント連帯
- P 19 丸岡同志追悼 重信房子

重信房子さんを支える会

五月六月の歌

重信 房子

鯉のぼり海に向かつて咆哮す桜渦巻く陸前高田

草刈の獄庭は雨に洗われて夏草の匂い病房に届く

寝えつつ日記に君の死記したり紋白蝶の翔び交いし夜

準備せし父の日のカード間に合わず吾子は涙で棺に納めし

我が涙君を憤怒で弔えば紫陽花の青いや増して青

星月夜静寂破りて朴の花匂いと共に倒れるごと落つ

悲しみは後から後からついてきて沙羅の花仰ぎ君を弔う

魂魄の彷徨する海いざり火の一つ二つに君を捜しぬ

獄舎出て不意のくちなし足下にもじずりの花心華やぐ

暑中お見舞申し上げます。

いつも暖かいお便り支援励ましありがとうございます。私
の抗ガン剤治療も順調にすすんでおります。

長期間直接お便りもできずとても心苦しくて心残りです。今年
は3・11大震災・丸岡同志の死と、気持を踏みにじられる事
件が続きました。

でも、その中から脱原発の力強い行動が育ち、丸岡同志
追悼で友情がさらに広がって、獄中処遇のあり方を問う力
になりそうです。

どんなにマイナスなこと、プラスへの出発点、そんな
ふうにならずとすごして生きてきたように、これからも元氣
ですみます。

みな様方にとって良い夏を健康でおすごしく下さい。

巖夏 房子



独居よ(5月29日~7月14日)

21世紀の世界の構造を変えていきたい

重信 房子

〔丸岡修さんの急逝を電報で知った5月29日、翌30日の丸岡さんに関わる記述部分は「ニザール丸岡のこと」に移しました：編集室註〕

5月29日 夕方6時過ぎ、「電報です」の声。「29日朝、丸岡死去。無念」とYさんからの電報でした。がく然……。〔以下移出〕

5月30日 〔前移出〕今日もぐずついた天気。これまで一番寂しい5・30記念日。

午後には、「オリブの樹」105号が届いて、励まされています。絵が短歌を引き立ててくれています。辻さん・唐一さん書いて下さってありがとう。

5月31日 梅雨で5月らしくない雨や曇。

5月のペイルートはもうジャカランダの花も終りはじめています。青い空にうす紫の花が一面に広がる大木、そのあと緑の葉が出て、5・30の頃には葉と紫の花の頃です。

5月は震災後のフクシマの人災の無責任なニュースばかりの中で、パレスチナでのナクバの月に各地で闘いが続いたことに励まされました。Mさんは「アラブ革命が国境を開く」という『グドゥス・アラビー』のコラムを手紙に同封してくれました。ユーチューブでもゴラン高原マジダル・シャムスでパレスチナ旗を掲げて多くの人が橋を越えてきて、パレスチナ側の人々と抱き合っている映像とか一杯あるとのこと。統一パレスチナの希望の闘いとアラブの民衆の意志が育って、とうとう28日にはエジプトに接するガザのラファ検問所の通行が緩和されたとのこと。

こんなニュースを丸さんもどんどん聴きたかったでしょう。丸さんに子供時代育ててもらったメイやMは、今日の手紙では、丸さんが重く苦しい病气から解放されたことを、哀しみと共にポジティブにとらえようとしています。

6月1日 今日は曇り空でしたがグラウンドで運動。100メートルのグラウンドを3周走ってあとは息があがったので歩いてみたり、クローバーの咲く芝生の

上で柔軟体操、真向法。空を見ていたら、また丸さんのことがあれこれ思われます。土の匂い草の匂い。ベーカーを思い出しつつ。

6月2日 雨ふり朝顔を昨日見かけたと思ったら、今日は一日中雨。

丸さんはここを出て、家族のようだったアラブ時代の仲間たちと会えただろうか。そして親族と大阪に帰ったことでしょうか。きっと東京で5・30の39周年をみんなと過ごしたでしょう。雨を見ながらそんなことを考えています。

昨日点呼後「告知放送」がありました。6月1日に新法の規則の改訂が行われたという告知放送。あれ？新法の再検討は今年これからと思っていたのですが。法の「規則」といので別物？これで終りということではないでしょうね。告知放送によると、改訂で大きく変わった点は3点あり、今後も社会復帰に向けて一段と努力するようにと述べた後、第一には日用品の装飾品や女子クリーム類が増えたこと、第二には自弁購入物品が増えたこと（1類処遇の人にはDVD、3類処遇以上はザブトン購入可、全員に制汗剤〔デオドラント風〕購入可）、第三にこれまで2類以上の人のみの電話による通信の拡大。人道上必要と認められた全受刑者。以上が改善された主な点で、今後新しい「所内生活心得」を改訂して配布するとのこと。もっと諸々改善点があると思ったのですが……。獄外の処遇改善の動きとどう連動しているのでしょうか。

今日は久しぶりに夕方Yさんよりお便り。「オリブの樹」のこと、そして丸さんの死を悼み、権力に殺されたことと怒りと共に被爆体験を語りつづけてきた「核と人類は共存できない」という反核反原発の闘いをさらに決意を込めて語っています。6・11の全世界の反原発の共同行動の力強い動きも。そしてMさんからも反原発、そして丸さんを獄外に取り戻せず病死させてしまったと申し訳ないとわびてくれて恐縮。こちらこそその言葉をみんなに伝えたいのです。Mさんによると、大阪の5月28日の「5・30の集い」の熱気ある討論もよかったようです。Tさんが基調を語ってくれたとのこと。東京関西それにペイルートでも「5・

30の集い」がつながったのです。いろんな友人から丸さんのお悔やみと励ましのお便り、本当に心が安らぎます。

「まつろわぬ魂魂天空駆け巡る」と丸岡弔う友よりの文。

6月3日 「内閣不信任否決」の記事を読む。姑息に辞任を先延ばしにした菅首相に、ひいきの朝日新聞まで「新代表を速やかに選べ」との主張。菅首相は十分デタラメだったが、浜岡原発休止と発送電分離が菅下ろしを加速したみたい。今の政治家には覚悟が全然見えない。マスコミ世論調査ののっかって仲間を排除し合うか、政権の前提となった「マニフェスト」も官僚や自民党の反対に見る影もない。下からの国民の意志をどンドン政策化し実現する力をつけ、たち遅れの政治家、企業人、官僚、そのシステムまで変革を！と願うばかり。

夕方、Tさんからの連絡で、外の様子がわかり感謝。丸さんを引き取り、山谷労働者福祉会館で仮通夜が行われ、友人やメイ、朝にはM一家も焼香して、京都からAさんも駆けつけ、5月30日の11時に霊柩車で「同志は倒れぬ」の合唱の中、大阪に発ったとのこと。

6月6日 今朝採血・採尿・排便。11時に診察。

血液検査の結果。白血球2990、好中球は31%で900ほどで、これでは第8クールはムリ。今日から1週間のノイトロジン注射をして来週13日(月)再検査でOKなら、6月15日から第8クールを始めるとのこと。

今日は芒種。もう麦秋から夏至に向かうのです。夕方友人たちからのお便り。岸和田小町さんは、獄中通信の塾長だったKさん(東拘時代からの丸さんの文通仲間)と大阪の丸岡さんの葬儀に行ってくれた報告感謝。Tさんからも葬式の様子。他の方々も感謝。京都で6月19日に丸さんの「お別れ会」を行うとのこと。みんなの愛情に感謝します。丸さんが昔よく話していたAさんに感謝。

6月8日 今日は曇り空か小雨か、窓からは小雨はわからないけれどグラウンドでの運動は中止。午前中11時半過ぎに診察、明日大腸の内視鏡検査が決まったとのこと、今日から昼・夕食は栄養ジュースのみです。今M子さんよりお便りと資料！ありがとうございます！丸さんのことで関西では多くの方が6月19日の準備をしてくれて、みんなに感謝を伝えてください。



6月9日 今日は久しぶりの晴天。グラウンドで運動の日ですが、私は今日は朝から腸の内視鏡検査の準備で行けません。準備は朝8:00過ぎから2リットルの「ムーベン」という経口腸管洗浄剤を午前中に飲むことです。「ベランダなら運動中でもすぐ戻れるので、ベランダの運動は許可します」というので、深呼吸して空を見るため10分くらい行こうと出かけました。戻って下剤下剤！これがなかなか飲みにくい。吐いてしまっただけならいいのでゆっくり飲んで11:30にやっと2リットルを飲みました。

13:30から腸の内視鏡検査。ほぼすべての間、Dr.がモニターに写っているのを見せてくれて、質問にも答えてくれました。ポリープが2つ(1ミリと5~6ミリのもの)。細胞検査のため器具で採取。パッと鮮血。興味深く観察学習して3時前に終了。

房に戻って溜まっていた資料本の交付物14点を受取り、丸岡さんの最期のことや弁護団の抗議声明なども読みました。夕方、Yさんからのお便り。彼女も八王子まで丸さんを迎え、山谷の労働者福祉会館での仮通夜でずっと居たそうです。丸さんの戦死は、彼を知るすべての人にとって痛恨事です。

また明大の「土曜会」の様子、クラケンありがとう。土曜会ののぼりはなかなか良い！6・11の反原発のグローバルアクションに登場初参加ですね。そして近々大学時代の旧友たちが面会に3人で来てくれると書いてあります！元気が出そうです。感謝。

旧暦芒種のエゴの木の花。「続く日常」の3首と共にデジカメ歌人より。「雨粒が涙滴形にひとつ落ち蟻溺れさす梅雨寒の朝」が好き。

6月10日 食欲もあり元気。午後には房内検査。夕

方、姉やTさんからの便り。4月に肝ガンの手術をしたのにますます元気で、変革日本のために走り回っている様子に励まされます。反原発のいくつかのグループと連携しつつ有効に闘っている様子。Yさんの活躍も見えます。やっぱり前向きな力がいい！ また6・19の丸岡追悼京都の集いの案内届いて、若い頃の丸さんの写真。昔は言われたらしい北大路欽也に似ているとか。来週は「土曜会」の友人たちの面会。

6月13日 週明け。体調は週末よくなかったが今日は食欲もあり。

朝採血、午後採血の結果。白血球も好中球も大変回復しているので6月15日から点滴、第8クールを始めるとのこと。

宮崎先生のお便り。割り箸で上陸用母艦を作る器用さ。写真感謝。また5・30結婚50周年？60周年？弁護士もですよね！ まだまだご活躍うれしいです。先生の大好きな蛙の季節ですね！

京都で6・19、東京で6・25丸さんとお別れ会に連帯と感謝を送ります。

6月14日 丸岡さんの追悼や文で日誌を送る紙枠がなく、日誌分は後回しとしました。今週は大学時代の旧友「土曜会」のクラケン、由井さん、本間さんが会いに来てくれると連絡があったので、15日は点滴の日で避けてほしいこと、まだ由井さんの本届いていないことを今日の手紙で発信したところでしたが、午後3人で面会！ 久しぶりのうれしい再会です。東拘で「未決」の最後の頃に、「いつ会えるかな……」と感謝の別れの挨拶はしていたのです。いつも知識を得ては、抗ガン剤治療をフォローしてくれるクラケンが腫瘍マーカーの様子や「第8クールが明日からか？」などでききと質問。医療関連後に由井さんの本のこと。「まだ届いていないの」「評判はいいよ」などと話に熱中。本間さんがほら！と「明大土曜会」の旗（のぼり何本も！）を持った土曜会の面々の6・11のデモの写真を見せてくれました。楽しそうに皆のぼりを持っています。N和尚（自治会委員長の昔の志のまま僧になった後輩）は仏門の旗を持って一緒にニコニコ。白髪交じりの元気な集団。生田校舎からの昔の仲間も多いとか。あっという間の30分。時間延長してもらい20分が30分だったのにすぐに終わってしまった感じです。

今日は「フォーリンアフェアーズ」、「アソシエーション」など資料届きました。M子さんYさんKさんお

便り感謝。夕方、Gさんより「夢と希望」通信の受取り通知。受け取れるといいのですが、交付は来週可能か？ 内容早く知りたいです。

6月15日 朝今日はグラウンドの運動とのこと。でも前は大腸内視鏡検査と雨、今日も不可。グラウンドにはほとんど行けないです。今日は入所以来初の映画鑑賞日。「ダーリンは外国人」とかいうもの。これも点滴で不可。10時半から15時まで第8クールのエルプラットの点滴。その際 Dr. から「6/9の大腸内視鏡検査で4カ所から採った細胞検査の結果、ガン細胞は見当たりません。ポリープは腺腫という普通のもの、当面問題はない」と言われました。

夕方、「新・原詩人」やN和尚からの便り、3人目の孫誕生、祝！ 彼は三里塚闘争の統一被告が裁判闘争を20年以上かかってよく闘いつづけて、今も志のまま「土曜会」に來られない友人とも交流してくれて感謝。手紙もちろん歓迎です。

6月17日 やはり点滴で食欲は減退。副作用で手足のしびれが昨日も今日も。午後メイの面会。丸岡さんの「追悼する会」があるので行くとのこと。丸岡さんのエピソード、メイの子供の頃の話など笑いながら話しました。哀しいから笑うしかないからと。

彼方よりオリオンの光届きしか

君の魂魄抱き連れゆく

6月19日 ずっと梅雨じめり。今日は京都で「丸岡さんを葬送る会」が行われているはず。検察権力への虐殺への憤りとパレスチナに殉じた丸岡さんに連帯して旧友たちのもとに戻ってきた彼の夢と志を抱きとめているでしょう。

新聞にパレスチナ国連大使のインタビュー記事。9月の国連総会で3分の2の支持をとりつけて、パレスチナ国家承認を求めて国連加盟をめざすとの意向。米国の「拒否権」で実現は不可能ながら、こうした当然の要求をつきつけつつ、安保常任理事国の特権を廃する国連改革へと広げてほしい。

6月20日 今日から夏スケジュールで、入浴が週3回になりました。久しぶりに曇りから晴れ間ののぞく朝です。「人民新聞」「救援」「夢と希望」など受取り、「決して忘れない、許さない」と丸岡さんへの追悼の思いと権力への抗議の文書が届きました。隔てられた場からみんなに感謝と連帯を送ります。

6月22日 今日は夏至。早朝から夏の太陽です。初の「真夏日」になり暑い！ 冬物のネル状のパジャマと厚手の七分袖シャツに五分ズボン下。厳寒の冬から夏の八王子は京都盆地みたいでもう暑くてベッドにいても汗がだらだら。7月4日から夏のパジャマに変わるとのこと。

午前中に診察。Dr. から第8クールの副作用の状態を聞かれて末梢神経障害の手足のしびれ、涙目などを報告。ひどければ一定期間ガン治療を休むことも考えられると言われましたが、今のところXELOX療法で腫瘍マーカーも下がっているし、日常生活に支障をきたしていないので続けることを希望しました。

6・19の京都の丸岡さんを送る会の様子、早々に短信感謝。100名近い方々が集われ、大谷弁護士も「執行停止獄外治療」を認めなかった検察の見殺しを糾弾していたとのこと。丸岡さんの妹さんが「こんなにもいい人たちに恵まれていて兄は幸せでした。心から感謝します」と語られたそうです。パンタさんがビートルズの「レヴューション」「7月のムスタファ」「ライラのバラード」を熱唱して下さったとのこと。みなさんありがとう。

由井さんの本届きました。「一人の女性の軌跡として面白く読める本になっていますね。殊にあの時代を知る者（運動に参加した人もそうでない人も）にとっては、自身のクロニクルと重ねて思い出を辿るよすがになると思います。多くの人に読まれるといいですね」と、本を読んだ感想がちょうど届いて同感！ 由井さんの暖かい性格のままに当時を好意的に書いて下さっています。でもムムム、昔の「小説」まで入っていて照れくさいです。でも父のこと、掘り起こして書いてくれたのはうれしいです。ありがとう。

6月23日 昨日とかわって朝は曇り雨らしいけど、すぐに晴れるとのこと運動あり。プランターのひまわりのでっぺんに、もう小さい蕾！ 昨日はグラウンドでの運動、晴れている上にねじり花がぽつぽつと咲いていて、クローバーの匂いもうれしい夏でした。今日はベランダで歩いたり走ったり。汗びっしょり。午後「夏物パジャマ1枚だけ支給します。今日から着ていいです」と、クレープの半袖が交付されました。よかった。すぐに冬物を脱いで着替えました。

夕方、後輩のYさんより「明大土曜会」のくわしい様子。60年明大中執委員長だったNさんの「60年安保と明治大学」の講演、6・11脱原発集会共同行動の情勢について（9条改憲阻止のFさん）、由井さん

の本の販売、メイからの私の近況報告が、きれいな写真と共に報告されています。本間さんの店「祭」に集まった29人の様子もくわしく報じられています。それに6・11の集会の様子も！ 明大土曜会ののぼり旗はすごい強力な武器ですね。N和尚の「南無妙法蓮華経」の赤いのも、また赤ヘルをちゃんと準備してきた猛者もいて、赤いハットのR介もいけてます。やっぱり京都も東京も、仲間たちの集いが私の元気の素です。感謝！ Yさんによると、明大、日大（9・30の会）と芝浦工大の3校は明大土曜会をきっかけに協同協力し合っているの、6・11芝公園に「3大学の旗をなびかせよう！」と結集したようです。テレビニュース番組でも3校、明大土曜会ののぼり旗も映ってた。とても目立ついい旗ですものね。

6月24日 すごい晴天。昨夜は少し窓を開けたまま寝たので、朝方の風が心地よい。今日もう1枚の夏物パジャマに下着など交付。暑いので前倒しして配ったようです。

点呼後、友人たちや家族からの便り。Tさんからは宮崎の介護施設で、3・11津波が押し寄せる情報で1時間のうちに車椅子の人、足の悪い人、高齢者を移動させたり大わらわだった様子が書かれています。にもかかわらず、防災など真剣に自分の問題として取り組む人や、行政の少なさに時として暗澹たる気持ちに陥ることもあるようです。それでも由井さんの本を読み、当時の「現思研の時代」のことを希望や夢と共に思い出しつつ、今も当時の「現思研方式」で、地域の有志と昨年からの地域コミュニティづくりを準備している様子を伝えてくれました。

他に資料お便りUさんTさん姉などに感謝。

6月25日 天気予報では雨の東京の丸岡さん追悼の会かと思っていたら朝から昨日のような晴。会の行われる頃に、私も空に向かって語りたことを語りました。その時突然に曇り空に変わりました。今日はまた大学の先輩千葉県の市議だったIさんの命日。しゃがれ声で決然と大学当局や民青を糾弾する白いYシャツ姿のざんばら髪、長髪先輩を思い出しています。合掌。

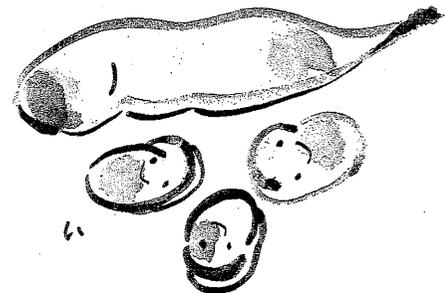
6月27日 肌寒い小雨で運動も中止。夕方Yさんよりのお便り、丸岡さん追悼の会に参加した様子とそこで「重信房子がいた時代」の購入をすすめて、著者が自分の近い同志の妹と知ってびっくり。その不

思議な縁を語り、家族の深い絆に感動したことなど切々と綴って下さいました。感謝。5月15日から1週間、「反戦老人クラブ京都」の旗を背負って脱原発デモも行ったとも！

6月28日 蒸し暑そうです。もうどこかで蝉が鳴いています。今日はグラウンドで運動。建物を出たところで、純白のくちなしの花がいくつも咲いています。駆け寄って匂いをかいでみたいけれど、それは叶いません。足下にはねじ花、もじずりの花です。楚々として美しい。屋外の空気はほっとさせます。

宮崎先生より由井さんの本を読まれた好意的な感想ありがとうございます。また前に私が弁護士50周年、60周年？と書いたので、弁護士会から60年表彰を受けたとのこと伝えてくださいました。60年でしたか。1951年に登録し同期は230人、表彰式には7人が参加され、「シャキッとしたのは4〜5人なのでがっかりしました。思えば日本男性の平均寿命をすでに越えているので、やむをえないでしょうね」とのお便り。バリバリ現役の宮崎先生にはかないません。私も自由になって、明大リパティタワー（宮崎先生総長の時建てたもの）で乾杯したい！です。どうかご健勝でいてください。

6月29日 今日は転房、引っ越しです。南向きの風通しの良い房から北向き風のない房に変わりました。ここは八王子に来て初めて入った房です。桜の深緑が繁り、つい目の先につぐみ、むくどり、ひよどりらが遊んでいて、風は通らないけど、夏は寒くないので悪くはありません。西北の山並みも美しく見えます。ベランダでの運動、引っ越し、入浴とパタパタ。午後には、この間手紙に同封されて届いていたさまざまな資



料、丸岡さん京都の追悼の会、反原発論文やTさんの地域の活動に関する新聞コピー、フランスからのY先生の日本人を先頭とした反原発デモの様子メール、土曜会や芝浦工大のネット記事、「支援連ニュース」や「人民新聞」、写真などさまざまあれこれ。想像しつつ読んでいたら9時就寝です。また友人から「よど号」柴田さんの葬儀の様子なども伝えてくれました。感謝。

6月30日 昨日でXELOX療法第8クルールの投薬を終え、今日から休業期間。午前中に診察。Dr. から体調を聞かれ、末梢神経障害の手・足の様子など伝え、7月4日に血液検査の結果を見て、胃内視鏡検査や第9クルールの予定を決めるとのことです。

また今日は回覧が回ってきました。「7/4(月)からの夏期処遇について」です。「運動、入浴後、上半身のみ裸、5分以内の拭身許可。水は洗面器2杯以内」とか「うちわ貸与」使用しない時の置場指示、「冷茶平日の3:00と免業日は昼食時一人300ccの麦茶供給」などの他「許可なくハンカチやタオルをぬらして冷やしたり不可」の注意事項も。また夕方には「7/1より1ヶ月刑務作業安全月間のお知らせ」。7/1〜7/7は全国安全月間で、7/1は国民安全の日でスローガンは「安全は家族の願い企業の礎、つくろう元気な日本」とのこと。「行事の一環として作業安全衛生をおりこんだ標語を募集します」との告知放送。

7月1日 夏らしい曇りの蒸し暑さ。Tさんより6・25東京の丸岡追悼の会の様子を知らせてくれました。また久しぶり元気なMさんからお便り！ ホッと筆跡に見入り、劇の写真も子供と共にいいですね！こちらが元気になります。S、Nちゃんのパースデーは7月ですよ。ハッピーパースデーを伝えて下さい。今日は余計に夕焼けがきれいです。ありがとう！近所のうぜんかずら、もう咲きましたか？

7月4日 今日から八王子医療刑は夏曆です。布団はビニール袋に入れてベッドの下へ。団扇も配られました。

今朝は採血、採尿。朝食前と昼食前にもう一度採血。でも診察は7月6日ようす。

運動し、入浴すると汗が引けません。風が入らないので初団扇でパタパタ。週明けは先週の受信資料たくさん届きます。感謝。友人たち、家族の便りもうれしい。Kさんからは市のフェスティバルに出展した豪華な牡丹のドライフラワーとは思えない、自然に咲いた

色と姿の作品を写真で送ってくれました。命のはかない夜咲くカラスウリの花も、よくこんなふうにとどめて作品になるのですね。感謝。

7月5日 今日は7・6の日。69年の時代を考えつつ晴れ間を見上げ、和泉校舎のあの時の野甘草のただい色の原一面を思い返しています。和泉校舎の裏道を「これが革命か？ 変だ。何でこんなことをする必要があるのか……」と考えながらとぼとぼ歩いた道、あたり一面の花。(編集室註：69年7月6日、明治大学和泉校舎で、ブント〔共産主義者同盟〕内の分派が指導部を襲撃し重傷者が出た)

午前中診察。白血球は3090 だったが好中球29.8%で、増やすため明日から4日間ノイトロジンの皮下注射。腫瘍マーカーは、CEAは8.2から8.0、AFPも13.0から12.0と少しずつ下がっています。CA19-9は46.9が51.0に増加になっていますが、全体としては順調に治療効果があるようです。胃の内視鏡検査は明日にとのこと。

「創」のSさんよりお便りと本を送ってくださったとのこと、感謝。「レコンキスタ」「解放」など資料も新聞も感謝。

7月7日 今日は七夕だし小暑。蒸し暑くなる夏はこれからです。朝から食事なしで検査態勢です。11時前に点滴で栄養補給しつつ待機。午後2:50頃から移動して胃の内視鏡チェック。手際よくDr. がさっと食道、胃とカメラを回し5〜8分くらいで、「ハイ、異常なしです」との声。私も画面を見つつホッとして終了。

昨日のSさんのお便りにあったように「創」2010年12月〜11年8月号までと『40年目の真実』(日石、土田爆弾事件の冤罪を問う)。Sさんの『新・言論の覚悟』も送って下さり恐縮、ありがとうございます。またYさんよりの丸岡さんに関する追悼と抗議と連帯の文。また宮崎先生、早々の暑中見舞い感謝。明大が中野区に土地を買い取り、第四の校地を取得して新学部「日本国際学部」など収容するとのこと。「時代に迎合し、産業予備軍、就職予備校的な現在の大学の体質には疑問を感じます」との言。先生らしい信念に共感！他Uさんらもお便りありがとう。

7月11日 朝からがんがん照りの夏。こんな夏は好きですが、運動入浴とずっと汗がとまらず、風もなく子供時代の夏や湿気の多いイエメンの夏を味わってい

る感じです。ベイルートは快適、ペカー高原も寒暖の差のはげしい過ごしやすい夏、イラクは身体から水分が抜かれてドライヤーの熱いのを吹き付けられる夏ですけど。

今日は「選択」それに「紙の爆弾」8月号受取りました。「紙の爆弾」とカンパいっしょありがとうございます。

夕方、N夫人よりお便り、「6・19の丸岡修君をしのぶ会」の様子。写真もあって臨場感が伝わります。またN君50キロ以上のキハダマグロと2時間格闘したのに、船長が銚子を打ち損じて逃がしてしまったとの沖繩久米島の様子。出所したら釣りに連れて行ってくれると約束しているのですが、逃がした魚は大きいです！資料などもまだ未交付ですが感謝。歌の友人やデジカメ歌人の小暑の便り、野甘草の花の写真ありがとうございます。歌も刺激を受けつつ詠んでいますが凡作ばかりの私。

7月13日 真夏の日差し。運動ベランダに出るとプランターのひまわりが1つ、直径10センチ大の花を咲かせました。小さなプランターの少ない地の中で開いた花は太陽の方に向けてきれいに咲いていました。他のプランターには白、ピンク紫色のペチュニア、もう一つの方にはマリーゴールドが盛りです。

今日は第9クルールの点滴が始まると思ったのですが、手違いがあって今日はDr. と診察になり、明日からとなりました。白血球も皮下注射ノイトロジンで増加したので点滴もOKです。

朝日新聞が大社説を掲げて、「いまこそ政策の大転換を。提言原発ゼロ社会」を訴えています。“朝日の世論調査でも段階的廃止への賛成が77%にのぼったことを示し、今ある54基のうち35基がすでに休止しており、8月にさらに5基が検査で止まるし、この夏の需要最盛期を乗りきれたら、かなりの原発はなくても大丈夫と証明したことになる。代替電源を増やし、電力会社による地域独占を抜本的に改めて自由化をすすめる。送電と発電を切り離し、東西の周波数の違いを改める”など新しい原発ゼロ社会に向けた提言を示し、朝日のこれまでの原子力社説のあり方も反省してみせています。3・11から、東電の発表と国外の危機感の違いなどをどう報道してきたのか、「記者クラブ」のあり方、報道のあり方まで問うてほしいものです。それでも「脱原発」は、方法はどうあれ、国民の共通認識になっているので、「9条平和憲法」の徹底とも「地方自治の重視」とも結びつけて、さらに国民本位の社

会への変革につなげてほしいと願っています。

この頃中東のニュースが資料が入らないせいもありますが、具体的な流れはわかりません。でも攻防はいつそう激しく公然非公然と続いているはず。アラブ民衆のコンセンサス「イスラエルの占領を許さず、イスラエルに対する米欧のダブルスタンダードを許さず、超法規的な治安当局秘密警察の暴力を許さず」と、混迷しつつ問題を問うているでしょう。その分まだジグザグが続きそうです。レバノンでもハリリ暗殺の「国際法廷」が、かつてはシリア政権を「犯人」とし、今はヒズブリーダーを「犯人」として指名手配し、レバノンにもホットな攻防が続いているようです。

11日にはカルテット（米・ロシア・EU・国連）がワシントンで会合を開き、パレスチナ和平交渉の再開をひき続き求める方針を確認したとのこと。しかしイスラエルとパレスチナの隔たりを埋める具体策は見せず、声明を出さなかったとの記事。イスラエル擁護のカルテットは何の価値も権威も失っています。アラブの民衆の公正を求める声が広がっているためです。イラク侵略戦争の時からブッシュやブレアがネオコン勢力と企てた画餅のカルテットのロードマップはひどいものでした。植民地支配の総督気分の内容。国連の下で中東和平を問うのではなく、米国の支配下に国連もロシアも取り込んで、カルテットを代表してブレアが動き回るこんな偏向機関は解散させねばと思います。米国政府の思惑で、9月以降パレスチナが独立国家のステータスを国連総会で得ることを阻止する役割を果たすでしょう。

米国の中東政策はイスラエルと不可分のユダヤ在米機関の承認なしには一步も進みません。この構造、世界のあり方を変えることが、アラブ民衆の根源的な公正を求める闘いです。それはまた、「脱原発」「反核」「9条に徹した日本」を求める人々の行動と結び合いながら、各地の民衆の共通の願いとして、21世紀の世界の構造を変えていきたいものです。フクシマ・ヒロシマ・ナガサキは、世界の変革と確実につながっています。

午後、「キタコブシ」「フォーリンアフェアーズ」脱原発資料その他たくさん受取りました、感謝。それにYさんからの土曜会の楽しい祝いの会やデモの土曜会のものぼりの写真を送ってくれました！楽しく見えます。「総天然色」の写真はリアリティー一杯です。

ベッド就寝時間の8時過ぎにジャムザワールドのニュースで、菅総理が記者会見で「脱原発依存」を言明したとのこと。また個人プレー。でも脱原発の布石は

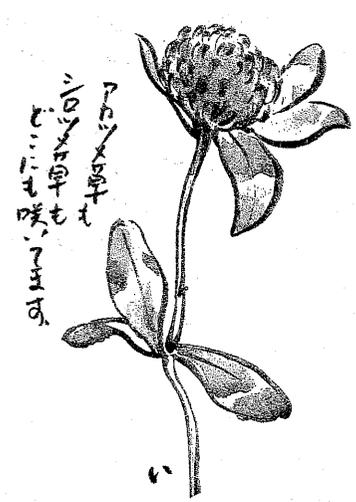
どんどん打って、ひき戻せない具体政策化を。各地の人々の運動が基盤となって、良識ある学者や専門家、超党派の脱原発議員、河野太郎とか役職を付けて、この国の古い仕組みの要にメスを入れてほしいものです。脱原発依存は「人気取り」としても国民の意志が実現をつくりだしています。

7月14日 今日から第9クルルの点滴。午前10時半過ぎから15時近くまで。その時 Dr. から「内視鏡検査も異常なしで、腫瘍マーカーの数値もよくなっている、ご家族を呼んで面談する予定です」とのこと。すでに姉の方には知らせているとのこと。今週か来週でしょうか。治療が一段落とのことで、あとはどうなるのでしょうか。

夕方、メイより手紙、日本語の便りです。普通の日本語が書けていて、努力の跡が見えるうれしい手紙です。Mさんからも便り。7月11日の関西電力本店（大阪・中之島）包囲行動の様子を熱く伝えてくれて感謝。「今夏は「節電」がキーワードですが、そこに情報隠蔽と民衆運動つぶしを孕んでいると思います。ウソの『電力不足』にだまされて、多くの人が熱中症になってしまうことは許せない。マスコミを利用して『原子力発電が全廃したら生活大変』『日本人はひとつ。協力しないのは非国民』。そんな空気がつくられているようです。お兄さんの大腸ガンよくなりましたか？ ガン闘争の連帯、兄さんにもNさんにもよろしく！

「キタコブシ」で将司さんの様子大分よくなってよかった！と読みました。

今日は先週に続いて点滴でグラウンドの運動週1回を逃がしてしまいました。



ニザール丸岡のこと

重信 房子

(1) 丸岡同志の死

愛する同志ニザール丸岡が2011年5月29日朝、重篤な病と闘いながら果てた。5月30日リッジ闘争の39年目を迎える前日であった。

ニザール丸岡は、リッジ闘争戦士たちと共に過ごした最初の仲間だ。ニザール丸岡は、リッジ闘争の翌日、ペイルートを発って帰国の途についた。チューリッヒに到着後、ベルンへと向かった。ベルンにある日本大使館で帰路に立ち寄る国をパスポートに「渡航先追記」してもらうためであった。その道すがら新聞を買った。いつも読んでいた新聞がなくて、たまたまヘラルド・トリビューンに手を伸ばして、それを購入した。開いた新聞に「テルアビブ空港作戦第4の男判明」「第4の男はOSAMU MARUOKA」と出ているではないか。

決死作戦に生き残って死を切望するアハマッド岡本にイスラエルはだまし討ちをした。もしこれまでのいきさつを話してくれたら自殺用のピストルを渡すと。アハマッド岡本はその通り取引きに応じ、丸岡という名の男がいたことも語り、ピストルの引き金を引いた。弾は入っていないかった。「約束」したイスラエル軍のリーダーはあざけりの笑いを見せて去った。これは後に岡本軍事法廷で私たちが知ったいきさつだが、作戦直後は唐突な「第4の男」のクローズアップに驚き、戸惑うばかりだった。

丸岡は新聞にある自分の名前を誰か他人の名前のように不思議な感じで見つめ、心臓が高鳴り大使館行き道を引き返した。その後、フランスなどでPFLPや欧州のグループの助けの中で潜伏した後、様子を見て帰国しようと8月にバグダッドに向かった。そこで私はニザールと再会し、何日も夜更けまで語り合った。72年9月、パレスチナゲリラがミュンヘンオリンピックのイスラエル選手団攻撃があった。その最中、リッジ闘争の「重要参考人」から、ニザール丸岡は突然「国際指名手配」となり、帰国することができなくなった。「第4の男」と騒がれた結果、余儀なく、しかし、ためらうことなくニザールはリッジ闘争の戦士たちと交わした約束を、日本の地からでなく、アラブの地から闘いを果たす道を選んだ。「第4の男」と言われた丸岡は、パーシム奥平らと共に過ごした時の呼び名「ニザール」としてアラブパレスチナ戦士の隊列に加わった。21歳から22歳に向かう秋のことである。

その時から39年、彼はアラブ赤軍を築き、日本赤軍創設時以来、軍のリーダーとして一貫して率先垂範の中で、苦難の先頭で闘ってきた。その結果検察権力は報復のごとく彼の死まで非情な仕打ちをくり返した。壮烈な戦死であった。戦友ニザール丸岡に感謝と連帯をこめて、定命尽きるまで、私もまた変革の道へと微力を尽くすことを誓う。

29日の夕方電報で丸岡の死を知った時のことを、日記に次のように記した。

夕方6時過ぎ、「電報です」の声。ちょうど朝から雨続きの空を見上げて、「明日は5・30リッジ闘争の日。丸岡同志はどうしているかな……」と独り言を言いながらカーテンを閉めたところでした。

「29日朝、丸岡死去。無念」とYさんからの電報でした。がく然……。

心臓がどきどきと高鳴って、思わず身体が震えてしまいました。

今、その想いのまま筆をとっています。

もっとも最前線で苦難の先頭に立って自己犠牲的に歩んだ戦友丸岡同志。

日本は大震災で変革が根本的に問われ、アラブでは民衆蜂起の中でパレスチナの新しい希望が生まれ、明日5・30には心を送って連帯を共にできると思っていたのに……。

今、丸さんと初めて会った1972年ペイルート、それから共に分かち合って苦難を乗り越えてきた日々が頭の中を巡り、身体を熱くしています。お互いに何度も危険や死に直面し助け合って乗り越え、「敗北を勝利の土台に！」と進みましたね。家族のように兄弟のように。丸岡同志と共にJRAが新しい展開を試みた87年11月に帰国したまま、獄中闘争を強いられた同志。

そして東拘の肺炎対応の誤診から危篤状態は脱したものの、以来ずっと心臓の重篤な病状に陥ってしまいました。検察は日本赤軍の過去の闘いに対する報復のように、命の瀬戸際にある丸岡同志を決して許さず、「刑の執行停止」を認めず、死刑の如き扱いに終始しました。

八王子医療刑務所は、「緊急医療」には即応しえない「療養施設」であり、ことに人手の居ない週末の丸岡

同志の異変をいつも心配していました。29日が日曜日だったことが気がかりです。けれども丸岡同志、あなたは長い獄中生活においても、志高く同志友人を支え、常に人びとの利益、人びとの幸せと求め続けてきたことを多くの人知っています。丸岡同志が私の励みであったのにもう居ないなんて……。

丸さん、私はあなたへの感謝と、一方に口惜しさで一杯です。あなたが87年逮捕されてから、丸岡同志の闘いに応えることもできず、望みを十分に実行しえず、死もまた、受け入れて通夜に臨む術もない。あの時、こんなふうにしたらよかったのに、この時はこうすべきだったと語り合う機会を失いました。

丸岡同志、きびしい病状の中で生き、支え励ましてくれてありがとう。何を語れば、彼の同志愛に応えられるのだろうか……。今は生き続け、丸岡さんの想いを一歩でも旧友たちと実現していきたい。遠くに居る同志も身近に居る仲間も、敗北を次の前進の糧にすすみます。

「丸さん疲れたでしょう。ゆっくり休んでいいよ。そう言っても、また腕まくりして彼岸で活躍のこまかい準備を始めているでしょう。5・30パーシムたちと話の続き、革命の続きを共にして下さい。リッダ闘争39年目は一番悲しい記念日になりました。でも丸さん、あなたのように前向きにまた進みます。再会まで！」

以上は、今5月29日の思いです。

永別の君に手向ける花も無く心を込めて歌うインターナショナル

5月30日 昨夜は寝つけず、丸さんの死を考えていました。29日朝、1棟むこうで死んだなんて。最期の救急措置はどうだったのだろう？朝まで気づかず……となっていないだろうか。私の病房にはナースコールはありません。大阪医療刑務所では、ベッドから手の届くところにナースコールがあり、詰所の看護師さんがとんできます。ここでは、通常の報知器がドアのところであり、ベッドを出てドアのところまで行って報知器（押すと廊下に板がおりて係官が目視）を押して待ちます。係の人が気付くと房に来て用件を尋ねて、必要なら看護師を呼ぶシステムです。私の病状では、それでまったく支障はありません。

丸さんの条件はわかりませんが、彼はベッドから緊急事態をどう知らせることができたのだろうか。丸さんが八王子は仙台よりも緊急体制がとれないと嫌がっていて、新舎になった東拘が一番良いと書いていたの

を思い返しています。私も、緊急医療システムがないので、抗ガン治療の分子標的薬アバスチン治療を断念しました。アバスチンがまれに腸管穿孔の副作用があり、それがいつ起こっても対応できるシステムがないので、アバスチン治療はできないとのこと。「予定手術」のシステムで「緊急手術」の体制にはないとのことでした。それに土・日は当直のスタッフが対応してくれるのですが、ウィークデーのようはいきません。そんな中、丸さんはがんばったんだと、改めて思いました。

今日もぐずついた天気。これまでで一番哀しい5・30記念日。

5月30日、丸岡弁護団はただちに東京高等検察庁に「抗議声明」を提出した。また、日本赤軍の解散後、かつての仲間を中心に志を継承すると結成された「ムーブメント連帯」は「緊急声明」を5月30日付で発した。なお私は、京都（6月19日）と東京（6月25日）で行われた同志追悼会に「丸岡同志追悼」文を寄せました。（各声明と追悼文は別掲しました：編集室）

(2) 旅立ち

丸岡が日本を出発したのは、1972年4月13日のことであつた。日本からギリシャ、アテネに降り立った彼は、アクロポリスへの遺跡へと行ってみたと言ふ。71年イスラエル内に調査で入国したユセフ槍森、サラーハ安田、オリード山田がイスラエルから出国して一息ついたところだという。道々黄色や赤い野の花が乾いた道野辺に咲き乱れ、神殿遺跡へといざなっている。見上げると、岩山のような景色。アクロポリス神殿に立つと、吹き渡る風を受けながら、何か新しい運命が自分を変えていくのかもしれないと、漠然と感じたという。「日本の民衆のための新しい活路を見出すのだ」と気負った高揚を感じながら神殿の円柱に寄りかかって、今生きてきた道を迎ってみた。

自分が「社会」というものに目覚め、革命を求めるようになったのはいつのことだろう。あれは小学校の4年の頃のことだ。ちょうど60年、日米安保をめぐる社会が騒然としていたせいだろうか。1950年10月20日生まれの自分は10歳よりも前。親は四国徳島の旧家の出身だった。でも自分が生まれるころには農地解放を経た没落地主。裕福ではなかった。父は大阪で商売を始めていた。自分が育つ頃には被差別部落、在日朝鮮人、つづり方教室など自然に耳に入ってくる環境にあつた。自分よりももっと貧しく差別さ

れている人々が居るということに、子供心に理不尽を感じた。そして小学校5年で神戸に引越して、大阪よりも貧富の差が激しいのに驚かされた。クラスメートには、社長の息子も居れば、掘っ立て小屋の生活を強いられている子も居た。被差別部落の子をのけ者したり、在日朝鮮人を差別しても痛みも感じない大人たち。何かおかしい。どうして貧しい者を差別するのか。同じ人間なのに。子供心にそれが芯のように心に刻まれた。

父は陸軍将校だったし、日本を変える者は防衛大学に入らなあかんのかな、と思ったりもする少年だったという。2・26事件の将兵の決起にもあこがれたり、社会を変えたいけど、どうすればいいのだろうと考える、他の子より少し社会的興味が強い少年に過ぎなかったのかもしれない。しかし、安保からベトナム戦争など社会の動きの中で、時代の洗礼を受けながら、それに敏感に反応しながら育つた。

中学3年の時には家が共産党系の民主商工会に入っていたので、日曜版「赤旗」をとっていた。それを読み、社会党にも共産党にも共感していた。高校生になると「朝日ジャーナル」を読んで、「新左翼」という存在を知ることになった。

そして67年、高校2年の時の10・8羽田闘争のテレビニュースに衝撃を受けたのだった。自分も何か立ち上がらなくてはと。あの時からだ。三派全学連が一番闘っていると思うようになった。それなのに「赤旗」を読むと「暴力学生」となじっている。日共には日本を良くする度量がない。自分も何かしたい！そうした欲求に駆られたのだった。受験勉強に疑問を持ちだしたのもその頃だ。受験勉強どころか社会に入り、立ち上がらなくてはならない！と。当時多くの同世代の若者たちが抱いていた、やむにやまれぬ焦燥の一つの姿に違いない。そして、実際に変革の道へ踏み出す機会が訪れたのは68年6・15集会へ参加したことだった。たしか中核派のピラでその集会を知った。初めての集会に参加し、そこで配られていた「毛沢東思想学院」のパンフレットに魅かれた。そして何かを創り出したいという思いで活動が始まった。とは言っても、政治的学生運動とは言えない、高校生の政治的ハプニング表明だ。学園祭に政治表明を持ち込んだり、当時のソ連のチェコへの軍事介入を批判したり、自衛隊の「国を守る」というポスターを「資本家を守る」と書き変えたり、という当時の高校生のお祭り騒ぎ的なもので、その分みな共感していた。

そんな楽しいひと時を過ごしながら、学生運動のメ

ッカの京大にやはり入りたいと猛勉強を始めた高3の夏。あれも一つの転機かもしれない。勉強しすぎたのか網膜炎になってしまったのだ。失明の恐れが高いため、静養のため浪人しろと医者に言われてしまった。それはショックだった。病氣も治まって、関西文理学院という予備校に入った。当初はがむしゃらに勉強して学生運動のメッカ京大に行くつもりだったが、ピラをまいてる予備校生が居たことがきっかけだった。京大に入る前からでも予備校でも活動家が居るのか、それなら一緒に何かできるのではないのか？そんな思いで共同し始めた。そうして「京都浪人共闘会議」という組織を作った。4・28の沖繩デーに参加したり、近畿予備校の授業料値上げに反対した。当時学生たちに人気のあつた滝田修を招いて「入試粉砕の論理とは何か」という講演会を開いたりした。そうして滝田らとも交流した。

「浪人共闘会議」は同志社の学館にアジトを間借りして、赤軍派の同志社や京大の学生たちを近くで見ている。自分は彼らとは一緒にはできないと思わざるを得なかった。パレードの中でも自称赤軍派の人々の作風はひどくて、こんな人らとやるのはごめんだと思っていた。活動するなら革命家らしい人間の品格とか、礼儀やモラルが必要だ。それらのない集団は自分には合わない。誘われても拒みながら「ベ平連」や「浪人共闘会議」で活動してきた。あの滝田修との交流が今につながる道のりだったのだろうか。滝田は「パルチザン」の提唱者だった。反乱の時代に論理を与え、当時党派に批判的ないわゆる「ノンセクトラジカル」の人たちが結集する拠り所をなした。いくつものパルチザンの闘いを！地域パルチザンとして地域の課題に取り組む者も居た。武装闘争を最高の闘いと認め、各地、各場で小部隊を形成して、生活、労働、闘いを担うパルチザン部隊の分散的広がり、別個に共通の敵を撃つこと、そんな風に闘いの方向が生まれていった。特に関西では全共闘運動における機動隊との攻防を地域へと闘いを継続再生させる新しい行動が起こっていた。大学は警察権力の導入によって、すでに限界が見えていた。予備校生として活動するうちに闘いの道が広がった。滝田の紹介で京大のパーシム奥平の仲間Iと出会ったことだ。京大パルチザンのIは、地域で反公害運動をやっている、60年安保世代を中心として藤本進治らが経営する「関西労働者学院」の活動もあつた。丸岡も参加していった。そして、労働し、学ぶ経験を通して、目的意識を持って学び直そうと考えていた。そういう意味では赤軍派のような活動

と対極に居た。労働し、ペ平連の活動、労働者学院の活動をしながら、変革日本にどう与するのか？ それでも今のままでは何か物足りないという思いが常に付きまとっていた。自分と共に浪人共闘会議を組織した者たちも共通した思いかもしれない。大学に入りきらぬままに、闘いを十分に果たせず、宙ぶらりんな想いだ。

そんな自分に京大パルチザンのIが1972年2月から3月頃、「アラブに行かないか？」と誘った。自分は即座に「関心がない」と断った。実際、日本の変革の道を考えている自分にとって、あまりに唐突な誘いだった。友人が日本・アラブ文化協会に居て、パレスチナ情勢などは聞いていたし、PFLPが70年のヨルダン内戦時に3機のジャンボ機をハイジャックして「革命飛行機作戦」を取行したのは強く印象に残っていたが、それ以上ではなかった。その後、再びIが訪ねて来た。「行く人が居ないので、行ってほしい」と言う。「日本で闘いたい自分にとっては、訓練して日本に帰る前提なら行っていい」と答えた。Iが困っていたこともあったし、パーシム奥平がすでにアラブに行き訓練しているのを、その時初めて聞いたからだ。「決死とかなら1年待ってくれ。そうでないなら行っていい。」最後にそう答えたのは自分だ。それから檜森に会って、行く方法やルートが指定された。それはあまりに急だった。当時勤めていた西陣のネクタイデザイン会社を辞し、両親には旅行に出ると一言言っただけだった。

振り返りながら、自分の置かれた道は決して自分の日本の変革の望みと矛盾するものではないと思いつつ、不安はあった。これからペイルートへと出発する。そこは戦場。どんな条件があるか分からない。最悪命を失うこともあるだろう。その割には、自分は何もきちんと家族に向き合っていないという思いがこみあげた。まっとうな人間として生きることを教えた父。自分が中学3年になった当時、我が家はやっていなかった。父は「とんでもない。実際に私は戦争で部下を亡くし、中国人に結果として手をかけた。それなのに戦争犯罪を逃れている人間が一人居る。それは天皇だ」と、いつになく厳しい口調で言った。そんな父ときちんと向き合って正直に語り合えなかった。また、妹、自分よりも勤勉でしっかり者の妹が密かな自慢であると同時に、妹にたしなめられるのが口惜しくて、邪険にしかできなかった。いい兄貴ではなかった。優しい母、母の信仰は気に入らな

かった。心配ばかりかけてしまった。もう会えないかもしれないということなどあるはずがないのに……と自分に言い聞かせながら、アクロポリスの丘から遙かな海を探した。

初めてのペイルート入りのことを、丸岡はそんな風に語ったことがある。

(3) 戦場での約束

そして、ペイルートへ。地中海はギリシャからペイルートまで青く続く穏やかな海原。両親の徳島の海はどんなだろうと、ふと日本が重なる海に飛び込むように滑降してペイルート空港へ着陸した。ユセフ檜森から詳しく聴いてきたペイルートの街。注意事項を頭に浮かべながら、指定された連絡先に電話を入れてホテルで待った。

その日のうちにサラハ安田から連絡が入り、待ち合わせ場所へと出かけた。そこにはすでにパーシム奥平と一緒にサラハ安田も待っていた。これまでの旅の安全チェックをして、Iからの連絡を伝えた。そしてすぐにホテルをチェックアウトして、彼らの指示に従って行動を共にした。丸岡が着いた時には、ちょうどPFLPの軍事訓練が終わったところだったという。ペイルート特有の乗り合いタクシー「セルヴィス」に乗って、街から標高2000メートルを超えるレバノン山脈を経て、レバノンのベカー高原北部にあるパールベックの街に着いた。

この街は聖書以前からの街で、その当時のアッシリアやカナンの民が信仰していたパール神、豊穡の実りの神の神殿があったところ、後にユダヤ教やキリスト教によって悪魔の神として排除され、ローマ時代にはビーナス、パッカスらのローマ神殿として盛えた街。観光地としても有名で、アテネのアクロポリスに劣らない。

この街からタクシーを変えて郊外まで再び車に乗り、さらに歩いた。草原に点在する農家の一軒がパーシム奥平、サラハ安田、アハマッド岡本らの訓練生活の拠点だ。そこで訓練生活を共にするようになった。生活規律はきちんとしていて、朝5時半起床、体操、掃除、食事、訓練、討議、食事。午後も軍事戦術フィールド訓練や机上訓練。毎日気持ちのよい生活だ。当初は身体がなまっていて筋肉痛が出るほどだったが、もともと規律ある作風や生活を志向する性質だったので、共同生活は楽しいものだった。

こうした活動の中で、これから作戦が行われようとしていることを知った。パレスチナの教官がパーシム

と机上討論やフィールドシミュレーションに訪れる。5月に入ってから、パーシムに作戦参加の意志を聞かれた。決死作戦だという。丸岡は率直に自分の立場と考えを述べた。「自分は、日本革命の新しいパルチザン戦闘のための訓練でここに来た。今、パレスチナのために命を賭す準備は正直できていない。あまりに短い。日本でIからアラブ行きを誘われた際にも言ったことだが、帰国を前提に出発した。そして、もし決死作戦などに参加するためなら、出発は1年待ってほしいとIにも檜森にも伝えた」と。パーシムは「すまん。当然の結論だ」と、詫びつつ、丸岡の心意気を理解したのだろう。当時、私はパーシム奥平とサラハ安田から、「ニザール丸岡は若いけど気骨がある奴だ。ニザールなら日本のことを任せられる。ユセフ檜森を呼び戻そうと思う」と話していたのを覚えている。

それでも、結局、ナクバの5月に作戦を実行したいというPFLP側の計画に合わせたのだろう。作戦に加わる予定ではなく、よど号の赤軍派の兄とコンタクトを役割として一緒にいたアハマッド岡本が欠員を知り、パーシムの要請に応える形で作戦に加わることになった。その結果、ユセフ檜森を呼び戻すことにはならなかった。そのかわり、ニザール丸岡は軍事技術体系や、当時の「赤軍体操」と呼ばれていた体操や、サラハの克明に記した訓練教程を引き継いで帰国する任務となった。

日本を出て約1ヵ月の間の激変は、ニザールをどれだけ鍛えたことだろう。作戦の準備が進み、作戦部隊の3人が5月中旬過ぎに出発することになった。引継ぎと挨拶を兼ねて日本人みんなの別れの宴を持った。この時初めて私はニザール丸岡と会うことになった。彼は当時週刊誌などで、赤軍派の女性活動家がアラブに行ったというのは知っていたが、「パーシム兄」から5月に会う前に話を聞いて「えー?! 一緒なの?!」とびっくりした。「擬装結婚」の相手が兄貴だったことも、その時に聞かされたという。

この宴に、私やボランティア日本人が食料を準備し、闘いの成功を祈りつつ、別れを惜しんで語り合った。すでに他で書いたが、私とニザールとで言い争いになったのもこの時だ。丸岡は公判証言で述べている。「PFLPが借りているアパートに他の日本人たちと重信らが来て、握り寿司を頂いた記憶がある。その際に、赤軍派はもともと嫌いだったので、重信ということではなく『赤軍派は信用できない』と私が言い、『高校出身の活動家は生意気だ』と重信が言い、兄貴が止めに入ったことがあった」と話している。この時、パーシム

ムとあれこれ引継ぎについてニザールとも話し合った。ニザールは静かでしっかりした若者という印象だった。

その後、5月20日前後だったと思うが、パーシムら作戦部隊は、ペイルートを離れた。

その後、私は荷物の預かりのために、ハマラ通りの裏のパーシムらの最後の部屋を尋ねたことがある。PFLPのパレスチナの友人は不在で、ニザールが一人居ってドアを開けた。「今ちょうど食事していたところで、食べますか?」と彼が聞いた。ダイニングテーブルには、アラブパンにコンソメスープと焼きなす、それにオレンジ。オレンジは10個で1ドルもしない安い街である。なんと質素な人だろうと驚いてしまったのを覚えている。

ニザールはパーシムから「作戦が成功したら出発する。失敗したら残れ」と言われていた。どこで、いつ、どのような作戦が行われるかは知らなかったが、標的はイスラエルに決まっているし、「決死作戦」というのは、私もニザールも知っていた。ニザールはPFLPの人の指示で、5月30日、私もよく知っているパレスチナ人の家に招待されて、作戦のニュースを今か今かと待った。夜11時のニュースも何の変化もなかった。遅くなると外人の一人歩きになるので、11時のニュースの後、彼は宿泊先へ引き上げたという。私も同様の気持ちでニュースを聴いていた。

初めてのニュースは5月31日午前零時(アラブ時間)のニュースだった。(日本時間6~7時の早朝)ニザール丸岡は、朝新聞を買いに待ちに出て、闘いの成功を知ったという。すでにペイルートの街は興奮している。「お前日本人か? 新聞代はいらない」と、ただで英語、仏語の新聞をくれた。タクシーも「日本人か?」と聞いて、ただになったという。「ああ、パーシムらはきちんと任務を果たしたのだ」、気持ちを引きしめてニザール丸岡はペイルート空港へと急いだ。「同志たち、必ず約束を果たすぞ、自分のすべてを投げ打ってでも日本の革命に本当の土台を作るんだ」何度も自分に言い聞かせながら。共に過ごしたベカー高原の訓練の数々、パールベック神殿の庭に寝転んで闘いの展望を語り合ったこと、熱い感情に不覚にも涙がこみ上げる。新しい人間に生まれ変わるようなペイルートからチューリッヒへの旅であったという。

そして、ベルンで立ち往生している。自分がリッダ闘争の「第4の男」として捜されている。地図を買い、鉄道の駅を自分で研究しながら、早くスイスを出ねばならないと思った。ペイルートからの切符で、スイスに居るのが分かるのは時間の問題だった。ベルンから

オリーブの樹 第106号

気を鎮めながらアルプスの方角へと辿った。そして、どの地点だったか昔聞いて忘れてしまったが、そこでリッジ戦士たちと訓練して記念に持っていた石のかけらを山に向かって投げた。その途端、清く澄み渡った空が雷鳴と共に、にわかにかき曇ったという。「あれは彼らの声だ。励ましの合図だったんだ」と彼は言ったが、私も話を聞いて、そうに違いないと思ったものだった。

こうして、ニザール丸岡は一人見知らぬ町で慎重に行動しながら、いくつもの列車を乗り継いで、スイスを脱出した。そして、宿泊カードとパスポートを照合しない安ホテルをまず確保した。そして、PFLPへ至急の連絡を送った。PFLPはすぐに在欧の仲間を派遣してきて、ニザールを安全な隠れ家に案内してくれた。しかし、ヨーロッパの闘う仲間たちの大っぴらさやワインを飲む習慣にあきれてしまったと言う。それに、かくまってはいるが、ニザールが何者かを知らされておらず、パーティに誘われるのに閉口したらしい。また、ニザールは「モラリスト」の上、心は非常事で一杯なのに、彼の心も知らず、ガールフレンドの日本人を連れてきた時には、怒りより呆れてしまったと後に語っている。文化の違いは、そんなたくさんの摩擦もあったらしいが、新しい「旅券」の準備を整えて、8月ニザールはバグダッドにやって来た。

リッジ闘争を称賛し、イラク政府がPFLPにシェルターや施設を提供してくれたので、すでに私は7月

にはバグダッドに避難していた。イスラエルの暗殺攻撃がアル・ハダフ編集長だったガッサン・カナファーン、パッサム・アブ・シャリーフと非軍人らをターゲットにしたためだった。イラクはニザールに対してもリッジ闘争戦士として快く迎えてくれた。

こうして8月、私はニザールと再会した。そして、何日も夜を徹してお互いにこれまでのこと、これからのことを深く語り合った。帰国の条件があれば、パーシムたちとの約束通りに、ニザールは帰国したかった。私もそれを望んだ。

しかし、9月のミュンヘンオリンピックのイスラエル選手団に対するパレスチナゲリラの攻撃で驚いた日本の公安当局は、突然ニザールを「重要参考人」から「国際指名手配」としてしまった。その結果、彼はパレスチナアラブの地から日本の変革、パレスチナの解放を含め、新しい闘い方を決断せざるを得なかった。

ニザール丸岡は、パーシム奥平らを継承する者として積極的にその道へと踏み出した。

そうして、リッジ闘争後のほんの一握りのニザールや私とボランティア日本人が、パーシムらリッジ戦士たちの意志を引き受けて闘うことを誓い合った。それが、アラブ赤軍、日本赤軍へと成長していくことになる。その当初の厳しい闘いは、ニザール丸岡の身を挺した活動の中で作られていった。その時代の闘いは『アラブ物語—PFLPとの矛盾』（「オリーブの樹」95-104号〔101, 102号休載〕）で記した。

抗議 声 明

東京高等検察庁 宛

2011年5月30

丸岡修氏の刑の執行停止申立代理人

弁 護 士 大 谷 恭 子

弁 護 士 上 本 忠 雄

弁 護 士 荒 木 昭 彦

して到底容認できないものである。

すなわち、貴庁担当検事は第6次申し立てに対し、4月27日の東京地裁の打ち合わせの席上で、以下のごとくの発言をした。

- 1 執行停止は瀕死の重症にのみ認める。
- 2 丸岡は、刑務作業をしており、1月に民事の証人（これは本人尋問のことである）になっていることから瀕死の状態ではない。
- 3 このような犯罪に刑の執行停止をすることは世論が納得しない。

以上の発言はことごとく事実誤認もしくは予断と偏

見に満ちている。本人尋問は、第5次までの申し立てに対し執行停止しなかったことに対する国賠訴訟において、生命の危機に瀕している同人の証拠保全としてなされたものであり、八王子医療刑務所内において限られた時間の尋問であった。更に刑務作業をしているとの発言は、前任者であった検察官の2011年3月24日意見書において、八王子医療刑務所からの照会回答書（平成23年1月23日付）に「労作時及び安静時の呼吸困難」の記載上「労作」を刑務作業と誤解したものである。労作とは食事、排泄等の日常動作をいうものであって決して刑務作業を意味しない。このことは上記記載の数行後に「作業及び指導といった受刑者としての矯正処遇に復帰できる可能性はない」と断言されていることから明らかである。丸岡氏は刑務作業どころか歩くこともできず、常時酸素吸入をしていたのであり、かようなことをよく読みもせず、また調べもせずに勘違いしたまま、執行停止などありえないと断言したのである。

くわえて刑の執行に関与するものとして、該執行が法の要件にかなっているかどうか、本件でいえば「刑を執行することが生命を保つことができない恐れがあるとき」かどうかを冷静に判断すべきであるにもかかわらず、保安・治安上の理由を優先させたのであり、あまりに無定見であり、理性を欠いている。これは丸岡氏が1970年代日本赤軍としてハイジャックをして刑事犯の釈放を得たことを指していると思われるが、この事実と現に「生命を保つことができない恐れ」の存否とはなんら関係しない。

当職らは、その後も貴庁の誤解を解くために、5月

決して忘れない、許さない。

拡張型心筋症の丸岡修さんに生きる途を！の会

一人の革命家が殺された。

2011年5月29日午前8時21分、八王子医療刑務所に在監、無期囚丸岡修さん、享年60歳。「殺された」という言葉は、比喻でも誇張でもない。文字通り、「殺された」のである。誰によってか？ 東京高等検察庁と八王子医療刑務所によって。

丸岡修さんは、「日本赤軍」メンバーとして、1973年の「ドバイ・ハイジャック闘争」1977年「ダッカ日航機ハイジャック闘争」に関与したとして、国際指名手配されていた。1987年、日本で逮捕された。2件の「ハイジャック闘争」で、2000年に「無

2日、12日、16日と申し立て補充書面を提出し、まさに丸岡氏が、貴庁が執行停止するべきと認めた瀕死の状態にあることを明らかにした。なお、丸岡氏に対しては2008年から病態をみていた外部医師が指名医を承諾し、同医師の承諾書が5月9日には八王子医療刑務所に送付されているものであるが、同人は、丸岡氏の病態が重篤な状態にあり、5月末までもつかどうかを危惧していた。更に5月9日には八王子医療刑務所も「重症指定」し、これの家族への告知が13日に八王子医療刑務所でなされたのであるが、その際八王子医療刑務所医療部長でさえも、指名医を受諾していた外部医師の予後判断を否定することはできなかった。

にもかかわらず、貴庁は執行停止の判断をすることなく、丸岡氏を獄死に至らせたのである。

重篤な拡張型心筋症であった丸岡氏は日夜呼吸困難にあえぎ、特に医療従事者が手薄になる夜間、鍵のかかった独房で、どれだけ辛く不安であったか心中察するに余りある。余命いくばくもないことは誰もが認めざるを得ない状態であったにもかかわらず、貴庁はそれでも執行停止せずに放置したのである。これは十全の医療が保障されないことによる肉体的苦痛に加え、独房で一人死の恐怖と戦わざるを得ないという精神的苦痛を無用に与えていたということであり、拷問的刑罰であったといわざるを得ない。

よって当職らは、4月22日申し立ての第6次刑の執行停止の申し立てに対し、速やかに執行停止の決定をしなかったことに、満身の怒りをもって抗議するものである。

期懲役」が確定し、宮城刑務所で服役。それ以前、未決で東京拘置所に収監されていた1996年に、東拘の医師の誤診により、重症肺炎に陥り、15日間ものあいだ、意識不明の「生死の境を彷徨う」状態に陥った。「慢性心不全」から、2004年にはついに、「拡張型心筋症」の診断を受けるにいたった。しかし、「刑務所医療」では必要な専門的な治療を受けることができず、何度か「緊急事態」に陥り、その都度、宮城刑務所では全く対応できず外部病院に搬送された。この事態を受け、弁護団は、2007年12月、「刑の執行停止」(第1次)を東京高等検察庁に申し立てた。以降、2010年9月に第5次、2011年4月で「執行停

オリーブの樹 第106号

止申立」は第6次になる。この間、弁護団は、詳細な病状を記した「補充書」を東京高検と裁判所に何度も提出し、丸岡さんの病状が「非常に危険な状態」にあることを、繰り返し訴えてきた。

「第5次刑の執行停止申立書」には、4名の「循環器系専門医」による詳細な意見書が添えられ、その内容は、「丸岡さんは重度で末期の拡張型心筋症と認められ、速やかに専門医による全身管理と投薬治療が必要」との診断が明記されている。加えて、「丸岡さんの入院治療を引き受けたく存じます」との「入院承諾書」も添えられていたのである。

こういった弁護団の切実な訴えに対し、東京高検は「執行停止はこれを行わないこととしたから通知する」という、一片の理由すら述べず、拒否し続けてきた。

今年5月にはいり、八王子医療刑務所は「重症指定」になったと弁護団と親族に通知してきた。これは、刑務所当局でさえ、丸岡さんの病状が「極めて深刻」であることを認めざるを得ない状態になった、ということである。遅きに失したことはある。弁護団は、この事態をすぐに「補充書」として東京高検、裁判所に提出すると同時に、八王子医療刑務所処遇部長への面接をおこなった。弁護団の「重症指定」とはどういうことを意味するのか、との問いかけに対し、驚くべきことに処遇部長は「一般面会が制限されること」と答えたという。刑務所には「医療」は存在せず、ただ「管理」のみある、ということの象徴がここに表れている。

追悼 丸岡 修同志

親愛なる同志がついに斃れた。530リッダ闘争39周年前日の29日午前8時半、拘束されていた八王子医療刑務所内で心停止により永眠した。丸岡同志の体調は先月より極めて悪化。呼吸器をつけたまま動けず、面会もできない時があった。

26日から排尿が困難になり、29日午前7時には、「苦しい」と訴えていた。

医療刑務所に留め置けば、治療どころか、死を待つだけの状態である事から、家族、弁護団、友人たちが獄外病院での心臓移植手術のための「刑の執行停止」を要求してきたが、5度にわたって検察当局は拒否してきた。あまりにも非人道的な検察当局の姿勢を怒りを込めて弾劾する。原発を推進する「国策司法」の体質は、刑務所行政においてもっとも人権意識を欠いたものとして現れている。

2011年5月29日に亡くなるまでの数日間の尿量は、5月26日 1200cc、5月27日 1345cc、5月28日 455cc、そして5月29日午前7時 130cc。なぜ尿量が極端に落ちた5月26日に「緊急事態」として外部病院に搬送しなかったのか。八王子医療刑務所はただただ放置していたのか。

5月29日午後6時、丸岡さんの遺体を迎えに行った私たちに、八王子医療刑務所当局は、その門扉を閉ざし、看守たちがバリケードをはって対峙した。かなりの雨の中、2時間以上も無言の対峙が続いた。何の意味があるのか。私たちは丸岡さんを迎えに来たのだ。

丸岡さんの遺体はその夜、山谷労働者福祉会館に安置され、一晩を友人たちと過ごした。次の日午前11時、炊き出しの準備で忙しい会館の労働者にも見送られ、大阪に向かった。

獄中24年目にしてのシャバであった。

気配りの人、丸岡修さんであったという。同時に自分をふりかえる勇氣。70年代の闘いが、時代的制約によって、現在の評価が否定的なものを含んであったとしても、その根底に流れるものは変わらず、人々への「愛」ではなかるうか。丸岡さんの「人となり」は、そう感じさせる。

丸岡修さんを死に追いやったものを決して忘れない、許さない。

2011年5月30日 ムーブメント連帯

呼吸困難の状態で闘病を続けてきた丸岡同志の苦痛と思いに、今、我々は応えるべき言葉を持たない。同志が苦痛にさいなまれ、まともな治療も受けられず、最後の力を振り絞って生きようとしていた28日、奇しくも我々は「再起に向けた」530・39周年集会を都内で開催していた。例年になく、熱意が込められた集会と同時刻に同志が生きるための闘いをしていたことを思うと涙が止まらない。

29日夜半、同志の身体は山谷労働福祉会館で遺族と友人たちの手に戻った。同志たちと一夜を共にする、それが我々ができた丸岡同志との「再会」と39年の月日を共にする時間だった。

獄中にはまだ、6人の同志が過酷な環境の中で闘い続けている。中でも闘病している同志の健康回復のために全力を尽くさなければならない。

丸岡同志が遺言として残した言葉は、我々の目標でもある。

「人が人らしく人として共に生きられる人間の国を！」(丸岡修 2011年2月22日)

丸岡同志追悼

丸岡同志！

呼びかけただけでまた涙があふれてきます。リッダ闘争で闘った戦士たち、パレスチナの戦士たちの姿と重ねながら、丸岡同志の壮烈な戦死をかみしめています。日本赤軍のかつての闘いに対し、検察権力はさまざまに報復を同志に科しました。東拘の誤診にはじまり、医療刑務所では対処できない病状の同志の、法で保障されている外部専門施設での治療申請を拒み、まさに「死刑」として同志を殺しました。また八王子医療刑務所では、検察の指示か施設の判断か、親族すら看取することもできなかったとは、重篤な病者にたいする何と非道な措置だったのでしょか。その中で、同志は壮烈な戦死を遂げたと思わざるをえません。勝利の中であるいは敗北の中で戦死した多くの戦友の一人として、またもつとも身近な同志として、同志に感謝と連帯をこめて永別の思いを送ります。

丸岡同志 同志と共に歩んできた70年代の楽しく、また苦しかった闘いが次々と思い出されます。私が初めて同志に会ったのは72年5月、リッダ闘争前のペイルートでした。ジャカラダが咲き、ベカー高原が花畑のように色とりどりの野の草花を咲かせる季節でした。作戦に出発する同志たちと引き継ぎや小さな宴を終えて、同志は作戦の翌日ペイルートを発って帰国の途につきました。それはパーシム奥平と約束したように、作戦が成功したら翌日に帰国し、日本の社会の中にパルチザン部隊を育てる役目を負っていたからです。しかし、同志がペイルートからスイスに到着したところで、「リッダ作戦第四の男OSAMU・MARUOKA」として、突然クローズアップされてしまいました。帰国の途上にあつた同志は、気を鎮めながらアルプスの方角に向かいどうすべきか考えたと言っていましたね。そしてリッダ戦士たちと訓練中記念にお守りとしていた石のかけらを山に向かって投げると、静かに澄みわたった空が、雷鳴と共に突如曇りだしたと言っていましたね。「あれはパーシムたちのはげました」と。

「日本革命に貢献したい」という第一の希望を持ちながら、事態を分析するために同志は潜伏しアラブに戻って来ました。あの8月どうすべきか語りあかしたね。しかし9月にミュンヘンオリンピックがパレス

チナゲリラに攻撃された直後、日本の公安当局は何の証拠もなしに、丸岡同志を「国際指名手配」としました。その結果、帰国の希望を持ちながら、パレスチナアラブの地を起点とする闘いへと自らの役割を定めたのです。リッダ戦士たちを思い、パレスチナ・日本の人民と闘いを思い、「闘いたい！」という義理と人情と同志愛がはげしく同志を突き動かしていたのを、私は知っています。丸岡同志21歳の秋のことです。

そして同志と共に、一握りの仲間とアラブ赤軍を育て日本赤軍を結成し、パレスチナや世界各地の友人たちと闘ってきました。当時のイスラエルの今も続く無差別テロや暗殺攻撃に対して、そうした攻防からパレスチナの闘いにも人民性に欠けた闘いもありました。パレスチナの闘いを範としつつ、私たちも人民性の欠けた闘い方もありました。その後、私たちは、70年代の闘い方を反省し自己批判しつつ再生をめざしました。そうした70年代の闘いの中でも、常に人民愛同志愛を基礎に、人民性ある闘いを求めて同志は先頭で闘いつづけました。ある時には、革命と同志を守るために敢然と拷問に耐え、ある時には危険をも顧みずに仲間を救出しました。またある時には、その地で仲間と共に逮捕されながら日本赤軍の原則を語り、「アラブ人同志の内紛には介入関与しない」という立場を訴えながら釈放させたばかりか説得して、当局者の協力をかちとったこともありました。PFLPからは一番の射撃の名手と訓練中賞賛されたこともあります。加えて子供たちとのエピソードや笑ってしまう失敗談など、愛すべき同志の数々の姿が浮かびます。

70年代を経て、ペイルートまでイスラエルが侵略した最中も、敵陣の東ペイルートと味方の西を結んで闘いました。そして陣型陣地再編の80年代、フィリピン・アジアから日本へと、フィリピンの同志たちと築いていた活動の途上、87年11月22日、帰国した日本で逮捕されてしまいました。同志の逮捕を知ったアラブ戦場で、私たち仲間もパレスチナの同志も、心情としてはどれほど「奪還闘争」を願ったことでしょう。しかし決して人民を楯にするような戦術の闘いはしないと、もう私たち自身がきっぱりと清算していました。丸岡同志、あなたもまたそのことを何度も公然と語り、自分への奪還闘争はありえないことを示し、

獄中で新しい仲間と友情を結びながら生き闘い続けました。21歳で出会い共に闘い始めて、37歳で獄中での闘いを余儀なくされて以来、60歳の還暦を越えて2011年の5月29日、リッダ闘争のあった5・30前日に戦死しました。

丸岡同志！共に悩み、つくりあげてきた日本赤軍が、自己批判の中から歩いた80年代以降の路線を同志のことばで語り続けてくれましたね。「人が人らしく人として共に生きられる人間の国を！」と。そしてそうした変革に参加する主体として、死ぬまで自らをふりかえり、過ちや公判でのあり方を正しながらすすみました。そして、これから「ダッカ闘争」を具体的に書き記す準備もしていました。同志は決して安逸を許さず、過ちのままにしたいと、自らを率直にとらえ返す誠実さを持ち続けました。あのリッダ戦士たちの誓いのように。丸岡同志、同志のそうした姿が同志愛を深め、団結を育て、「敗北を勝利の土台へ！」と、全員が結束してすすむ私たちの隊伍を育ててきました。世界の友と結び合い、助け合い、強大な敵に立ち向かい、どの仲間も真剣で誠実、楽天的だった「日本赤軍」を今も、私は誇りとして、同志を思い返しています。

「地獄でまた革命をやろう」と旅立ったパーシム典平やサラハ安田、オリード山田、「日本赤軍に居ること

が人生の幸せ」と言いつつ闘い拷問の中で戦死した日高同志、「土地の日」パレスチナに連帯して決死したユセフ槍森、そしてまた多くのパレスチナの、世界の戦友たち。同志は彼岸で仲間たちと再会し、闘う人々に彼岸からエールを送っているにちがひありません。そしてまた、親孝行の機会を失ったご両親に詫びながら境涯を語っているのでしょうか。仲間や友人たちは、同志愛に満ちた丸岡同志の気配りの数々を感謝と共に心に刻んでいます。

丸岡同志、百メートルと離れていない1棟向こうの病棟で過ごしながら、同施設収容者について一切書けないという規則の中で、同志が仙台に居た時よりも何も書けなくなっていました。でも、いつも同志は身近に在りました。今も「おはよう！」と呼びかけてしまいます。遅かれ早かれ彼岸での再会の機会があります。それまでは、どんなに微力でもこうべをあげて、闘い変革を求める隊伍の一人として、私も生きつづけます。脱原発、米軍基地もいらぬ九条日本の「人間の国」をめざして。

仲間たち友人たち 葬列を再び闘いの祭に！

永別の君に手向ける花もなく

心を込めて歌うインターナショナル

6月7日記 房子

由井りょう子著

情況新書 重信房子のいた時代 世界書院 1260円(税込み)

71年早春、重信房子は友人たちの前から忽然と姿を消した。ふたたび消息が知れたときには、「国際テロリスト」として恐れられていた。だが、その生い立ちは典型的な戦後日本のつましやかな家庭であり、まぶしいばかりの戦後民主主義のなかにあった。重信房子を育てた家族の愛と絆を読み解く。

著者からみれば、頼りになるきれいなおねえさんのひとりだった重信房子。高校時代の同級生は、詩や小説や草花が好きで、「貧乏な友だちのことばかり気にかけるシゲ」だったという。そんな彼女が、成長とともにどう変わっていったのか、あるいは変わらなかったのか。等身大の重信房子を描きながら、彼女の過ごした60年代、70年代、そして青春とは、家族とは、を問い、考える。

後書

5月30日の朝、山谷の労働者福祉会館で丸岡修さんと別れた。彼は大阪に帰る前の仮通夜で会館にいた。「ごめん」とあやまった。重信証人法廷で見知り一度面会しただけだが頼もしい人だった。今朝明け方ベランダに出たら、13センチくらいのムカデがスノコの下に逃げ込んだ。丸岡さんのことや原発報道で荒れた胸を、ムカデへの愛おしさがひたした。本誌は以前からその会館の好意で印刷と発送作業をする。明日もその会館に行く。 Q

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

頒布価格 500円

「正誤」表

第 106 号

- | | |
|----------------------|----------------------------------|
| ① 4P(6/1)上から3行目 | ベーカ―→ベカー |
| ② 4P(6/2)11行目 | <u>とい</u> ので別物?→ <u>という</u> ので別物 |
| ③ 7P(6/23)4行目 | <u>ねじり</u> 花→ <u>ねじ</u> 花 |
| ④ 9P(7/5)1行目 | 7月 <u>5日</u> →7月 <u>6日</u> |
| ⑤ 12P 右上から (2)旅立ち7行目 | <u>道野</u> 辺→ <u>道の</u> 野辺に |